

# 私にも言わせて!

## 第41回

# 田舎好き、北海道好きが高じて 気がついたら保健所長に



北海道空知総合振興局保健環境部滝川地域保健室 室長 (北海道滝川保健所長)

村松 司

平成11年自治医科大学卒業。卒後、北海道東部・北部のへき地・離島医療に携わり、26年4月より地域保健行政に従事し、27年9月より現職。内科学会認定内科医・消化器内視鏡専門医。

昭和49年6月、北海道東部の中心都市である釧路市で生を受けました。幼いころは、家にある道路地図や住宅地図をいつも眺めていて、この道をずっと行くとどこに行くんだったかと考えているような子どもでした。地域での仲間とともにしたアマチュア無線活動や、長距離サイクリングなどの趣味が高じ、住むなら田舎、仕事も田舎、と夢見るようになってきました。

### 医師になるまで

家庭の経済事情もあって地元を出て遠方の大学には行けないと言われていました。札幌周辺に住んでいれば、住居費・生活費などの余計な負担とは無縁に多くの選択肢があるのに、遠く離れた釧路の地で、目の前の選択肢の少なさを呪ったものです。ただ、呪ってばかりでは自分の人生が不幸になりますし、愛する自分の故郷まで呪いたくはなかったので、与えられた環境でどう自己実現をしていくかを考えたときに、安定志向、公務員、できれば理系の技術職、という条件が挙がってきました。

そしてかなうなら道内の地域間格差を埋めるような仕事や、転勤が多くて広い北海道のあちこちに行ける仕事があったら、と考えました。そういう環境の中、地元高専中途編入、北海道職員(初級)、国家公務員Ⅲ種(税務の内定をもらって、あとはどの人生を歩むか自分で決めるだけという状況となったとき、たまたま目にしたのが自治医科大学の入試案内でした。北海道の田舎の医者になったら、前記すべての条件はクリアでき、授業料も全額貸与で義務年限を果たせば返還免除、臨床を経験してから医療行政に入れば、北海道全体として地域医療をサポートする側に回れ

る。こんなにおもしろくてクリエイティブな仕事はないと思い、ダメモトで自治医科大学に申しました。ただ、自治医科大学に申ししたのはもう一つの理由がありました。地元での入試面接は道庁職員が対応してくれるということを知り、入試資料(平成4年当時)によれば当時から医療過疎が問題となっていた釧路・根室地域に自治医科大学卒業生の派遣が少なかつたことに、直接抗議することでした。

当時の私は道東在住それ自体が、進学も、医療も、就職も、あらゆる面でハンディになる環境を心底憂えていました。そもそも自分の学力で合格できるかとも思っておらず、本庁職員との面接試験では「道東を札幌目線で見ている仕事をしてはいないか?」泊まりがけでないと行けない札幌の机上でことを進めている人間に、道東の何がわかるのか?」等々、就職も内定してお

り失うものがないことをいいことに本庁や道政に対する批判を延々繰り返したものですから、まさか合格するなど夢にも思いませんでした。当時のご無礼、何卒平にご容赦ください。

### 卒業後、 一般・消化器内科臨床医として

自治医科大学の卒業生が卒業後歩む道は、出身都道府県によってまったく違うのですが、当時の北海道出身自治医科大学卒業生は国家試験合格後、道に所属すると同時に旭川医科大学のどこかの医局に所属することとなっていて、私は第三内科(現・消化器・血液腫瘍制御内科)に入局しました。道東在住者の選択肢の少なさを呪っていた私が、かつて「釧路医大」構想を散らした当の大学に入局したのだから、人生とは因果なものです。

医局人事で配属される病院はお

おむね体制ができて上がっていて、将来にわたって自分がいる場所ではないなと思った一方、道本庁の人事で道東も含め医療供給体制にさまざまな問題を抱える地域の医療に従事しましたが、「地方行政との折衝」や「限られた人的資源である医療従事者が地域で必要とされる能力を遺憾なく発揮し、それを住民が十分に享受できる環境づくりに」に消耗していく地域の臨床医の姿を見ながら、そのサポートを自分のライフワークにしたいとおぼろげに考えていました。

9年の義務年限が終わり、その後2年間の所属医局人事による地域派遣を経て、北海道全体の医療体制確保にかかわる行政の仕事がしたいと改めて希望し、北海道に再入庁しました。「まずは地域での実績作りを」とのことで北海道医療政策局地域医師確保推進室(現・地域医療推進局地域医療課医師確保推進グループ)からの派遣として道立から地元広域連合に移管した病院の立ち上げ支援業務や、離島の病院での診療業務・管理職務に携わり、ほかでは得がたいさまざまな示唆を得られとても貴重

な経験となりました。ここで得た知恵や度胸は、いまでも自分の仕事に対する強力な推進力となっています。

に立たなければ見えないものが見えるようになってとても充実した日々である反面、この位置からは見えないものもあります。若手新米所長の心得としては、職員がどこでどのようにフォローしてくれているのかに常に敏感であればいいことに気をつけなければと思っています。「自分以外の人間はすべて何かの分野のエキスパート」であり、相談・意見交換は可能な限り自分から心をかけ、「裸の王様」にならないことが大切と考えております。

地域医療構想、健康危機管理など、今後も課題が山積の保健所行政ですが、その一角を担う者として、粉骨砕身、北海道のために頑張っていきたいと思っています。現在の立ち位置を与えていただいた北海道保健行政の諸先輩、北海道民の皆さまに改めて御礼申し上げますとともに、皆さまには何卒ご指導・鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

### 行政医として、いま考えること

その後も地域医療にかかわる業務を希望していたものの、道立保健所の所長業務の多さや若手行政医の不足など、今後の地域保健行政をどう維持していくかが大きな問題となっていること、保健所の経験は将来地域の医療確保の業務をやっていく上でもいい経験になるということ、自分自身納得の上で、行政マンとしての初任地である岩見沢保健所で保健所行政を学ぶこととなりました。

職員の疾患の相談に医師として答えなければいけないし、報道対応もある程度任せました。結局、麻しん届け出は7例を数え、その年の北海道内の麻しん届出数が年間13例に対して実に半分以上という異常事態となりました。その中で、積極的疫学調査のやり方、感染症健康危機管理の考え方、関係各所へのリスクコミュニケーションを学びました。その詳細は昨年本誌12月号に掲載していただきましたのでご参照ください。

さて、先述のとおり北海道の行政医師不足の中、本年4月からの国立保健医療科学院での3か月研修を経て、9月1日より現職(滝川保健所長)を拝命いたしました。「行政経験1年半で所長はきつい」と感じたことは事実ですが、他県でもっと早く所長になった話を聞くにつけ、「甘えてはいられない。周囲に迷惑をかけないよう、走りながら、死ぬ気で勉強しながら実務をこなすしかない」と思うようになりました。

現在は、35名の職員に支えられ、時にフォロワーを受けながら毎日の業務に臨んでおります。この位置

な経験となり、ここで得た知恵や度胸は、いまでも自分の仕事に対する強力な推進力となっています。

赴任当日、席につくや否や、当時の健康推進課長から行政勤務歴ゼロの私に、「麻しんが3例立て続けに出ています。資料はここに用意したので読んでおいてください!」先生にも対応してもらいますから!!!

「えー」と言う間もなく、うず高く積まれた麻しん関連の各種通知や資料を必死で読むしかありませんでしたが、勉強ばかりではないけ

■著者プロフィール  
\*村松 司(田一郎) 過去の事例から学ぶ健康危機管理事例(8) 道庁保健所管内各市町村における麻しん対策(2014年) 保健所長 46(3) : 22-24, 2014